

# 場所の記憶の共有化による地域のなじみに及ぼす影響\*

～兵庫県川西市大和団地をケーススタディとして～

Effects of the familiarity to the house environment by sharing personal memories at a suburban new town \*

松村暢彦\*\*・尾田洋平\*\*\*・來田成弘\*\*\*・楠田勇輝\*\*\*・平井祐太郎\*\*\*\*

By Nobuhiko MATSUMURA\*\*, Yohei ODA\*\*\*, Narihiro KIDA\*\*\*, Yuki KUSUDA\*\*\* and Yutaro HIRAI\*\*\*\*

## 1. はじめに

郊外ニュータウンは高度成長期の都市部への流入人口の受け皿として都市近郊に作られてきた。当時、郊外ニュータウンの団地に住むことは、ワンランク格上の生活を享受するものとして人々の憧れとなった。時を同じくして、公団が作った団地からの転居も含め民間の郊外戸建住宅地が作られた。持家ということもあり戸建のニュータウンは「住宅双六のあがり」と位置付けられ集合の団地以上に上流感を提供する住環境として強い輝きを放った。これらの郊外ニュータウンに代表されるように1950年～70年頃、日本の住環境に最も求められたのは「目新しさ」「上流感」であったと言える。しかしその後、住環境に対するニーズが変化した。団地開発が一段落すると住宅も付加価値をつけないと売れない時代がやってきた。デザイン面で明確なコンセプトをうちだしたり、環境共生を進展させライフスタイルにまで踏み込んで差別化をはかったり、社会の成熟化とともに個々の住環境に独自性が求められるようになってきている。

そのような中、初期の郊外ニュータウンは様々な問題をかかえるようになってきている。住宅・公共施設の老朽化により支えであった「目新しさ」「上流感」は影を潜めた。また空間を画一的に作りこんでいるため没場所性が際立ち独自性もないといわれている。ソフト面においても、郊外ニュータウンは歴史的・文化的背景がないために内発的に独自の活動が生まれにくい。地域として高齢化してきていることも大きな問題である。郊外ニュータウンは元々「サラリーマンの夫、専業主婦の妻、子ども」という標準世帯を中心に構成されたため、その後40年近く経過した今、地域の高齢化は急速に進んだ。バリアフリー化に遅れたことやそもそも丘陵地や傾斜地を

\*キーワード：場所の記憶，地域愛着，物語，態度変容

\*\*\*正員、工博、大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻（吹田市山田丘 2-1、matumura@mit.eng.osaka-u.ac.jp, TEL06-6879-4079、FAX06-6879-4597）

\*\*非会員、学士、大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻

\*\*非会員、工修、東京急行電鉄(株)

切り開いて作っているため地域で暮らす高齢者にとっては優しい住環境とは言えなくなっている。このようなことから、郊外ニュータウンは精神的にも肉体的にも慣れ親しみにくいものになってしまった。結果、都心回帰現象が起り、空き家・空き地が増加している地域がある。

これらの現状を踏まえて、郊外ニュータウンには何が求められるだろうか。かつてのように「目新しさ」「上流感」を再生するのも一つの方法である。しかしこういった開発は一時的なものに終わって空間を食いつぶすだけになりやすいし、日本経済が全体として上昇気流にある時は誰もが手を伸ばせば届くものであると思うが、経済が低迷する昨今においては多くの人が享受できるものであると言いはし難い。空間を食いつぶすことなく人が住生活を営むためには人と場所との絆・独自の絆が結ばれ、長くその地に安心して住むことができるのが良いと考え得る。

そもそも郊外ニュータウンの歴史が浅いといっても40年来の歴史を有し、その間、住民の生活がその空間で営まれ、さまざまな住民の記憶が重層することによって空間を場所化していると考えられる。たとえば、現在では閑散とした街区公園で公園としての機能や魅力が失われてしまっている、ある住民にとっては自分の子どもが苦労の末やっと自転車に乗れるようになった思い出のつまった大切な場所かもしれない。「人が死ぬのは一度でも人間は二度死ぬ」という言葉にあるように、人間は人との記憶の中で生き続ける存在でもある。地域とともに暮らす住民の大切な思い出、場所に染みついた思い出、記憶を共有することによって、一見失われてしまったかに見える地域の絆を取り戻すことができるかもしれない。私たちの家族、近所の人々との思い出、小さなものがたり、を地域社会で共有することで、なんとなくつながっている感覚、地域のきずな絆、なじみを回復することができるかもしれない。こうした小さくも貴重な場所の記憶はこの世界のあらゆる地域にちりばめられていると同時に、消えてなくなりつつもある。イベントを通じて新たな場所の思い出を共有化することも必要かもしれないが、そればかりではなくこれまでの過去の記憶を共有化することで地域に対する共通の意識の基盤を形成し直すことはより一層、重要な活動であると考えられる。

そこで、本研究では地域の絆を住民の地域のなじみととらえ、住民の地域に対するなじみの意識構造を明らかにし、場所の記憶を地域住民で共有することによって地域に対するなじみに及ぼす影響を検証することを目的とする。

まず、地域のなじみの定義を行い、場所の記憶を共有するためのプロセスを示す。具体的には、住民の地域に対する思い出をヒアリング調査やアンケート調査によって収集、整理し、動機づけ冊子を作成する。その上で、地域のなじみを把握するためのアンケート調査票を動機づけ冊子を配布する前後に配布し、その効果を分析する。分析にあたっては、地域への「なじみ」の意識構造を明らかにした上で、事前・事後のアンケート調査を用いて、場所の記憶の共有によるなじみに及ぼす影響を明らかにする。

## 2. 「地域のなじみ」の定義

「なじむ」という言葉の持つニュアンスはいろいろあり「なつく」「よく溶ける」「味がよくなる」「長年住んで親しい人が多くなる」「慣れて親しみをもつ」などの意味の違いがある。なじみを扱った既往研究は少ないがいくつか見られる。だがこれらの研究における定義は様々で統一的にはなっていない。高橋・鈴木はなじみの概念的定義を「環境に対する親近感」とし「愛着感」のニュアンスから定義している<sup>1)</sup>。また河辺は「好き嫌いとは関係なく、ある場所を訪れることにより自分なりにイメージでき、心象風景を描くことができること」としている<sup>2)</sup>。これには空間の構造的な個性だけでなくその意味性も含めて多角的に認知されることが必要であり、高橋・鈴木と同じく精神的な根差しもって定義しているが、愛着感を含めていない。一方、精神的な根差し方ではなく肉体的な根差し、つまり身体的・行動的な変容をもってなじみを定義している研究も見られる。外山らは痴呆症老人が新しい住環境で如何に自分たちの生活を構築していくかを検証している<sup>3)</sup>。この研究では概念的な定義が明示的には示されていないが「自発的に空間を使いこなす状態」を「なじんでいる」として検証が行われている。また樋沼らはなじみを「主体性が生まれ、空間やモノを使いこなす創造性、独自性の形成が徐々になされていく過程」である<sup>4)</sup>とし、外山らの研究と同じく「主体的に使いこなす」という行動変容によってなじみを定義している。

また、なじみを構成する要素として「慣れる」と「親しみを持つ」が挙げられる。「慣れる」とは「その状態に長く置かれたり、たびたびにそれを経験したりして、違和感がなくなる。通常のこととして受け入れられるようになる。」ことであり、愛着程の積極的な態度ではな

いが肯定的に違和感なく対象を捉えている状態を指す。「親しい」は「互いのうちとけて仲が良い。懇意だ。」の意で愛着感に相当する概念とみなせる。これら「慣れ」と「親しみ」という2種類の精神的な絆の結び方が「なじみ」を構成している。しかし、既往研究にもあるようにこと住環境へのなじみに関しては真に精神的な根差し方をしていけば、それは必ず行動の変容にも現れると考えられるので肉体的な意味でもなじみを定義し多面的に捉える必要がある。

なじみという概念と関連の深い概念に「場所構築」と「愛着」がある。場所構築はその字面からもうかがえるように精神的な想いでなく行動、つまりその場所において何かをしていることがその成否の判断の基準になる概念であり「使いこなす」と意味が近い。林田は場所構築を扱って、交流やリフレッシュを目的として空間を使いこなしていることを場所構築の基準としている<sup>5)</sup>。他にも西田<sup>6)</sup>、阿部<sup>7)</sup>、橘<sup>8)</sup>、橋本<sup>9)</sup>、永峰<sup>10)</sup>などでも感情は切り離し、空間を使いこなしていることを場所構築の基準として採用している。愛着は反対に精神的な想いの有無がその成否の判断基準になる概念であるが、この領域では積極的な態度での愛着から、単に慣れているという程度のものまで様々な研究が成されている。

以上を踏まえ「なじみ」を「使いこなす」とほぼ同様の意である「場所構築」と「慣れる」「親しみ」を合わせた概念の「愛着」の間の概念として位置付ける。

## 3. ケーススタディ地区の概要

大和団地は阪神北部地域で大阪大都市圏の近郊住宅地として、民間の郊外ニュータウン開発による人口増加を伴いながら発展してきたところで、川西市の北寄りに位置し猪名川水系の初谷川と塩川に挟まれた尾根に開発されている。地区北東側では大阪府豊能町と接しており同町光風台などのニュータウンが隣接している。事業年度は昭和42年～昭和57年、計画面積は173ha、計画戸数は



図-1 大和団地

4400戸、現況世帯数4470世帯、計画人口は18000人（平均世帯人員4.0人、現況人口は11729人（平均世帯人員2.6人）、事業種別は区画整理である。大和団地の住宅はほとんどが戸建て住宅で、わずかに共同住宅（分譲・賃貸マンション）がある程度である。敷地のほとんどは戸建て住宅の連なりとなっており、それぞれの家のデザインの違いはあるものの、これといったアクセントの無い画一的な集合になっている。

畦野駅前にコープうねのなどが立地するが、大きな商業集積は見られない。かわって個人商店が相当数見られ、地域の特徴となっている。また自治会活動が盛んで、その拠点として公民館が4つあり、サークルなどにも利用されている。また公園が数多く整備されており、地域の特色となっている。なかでも団地中央の平木谷池公園はかなり大きく、イベントなどにも利用されている。

### 3. 場所の記憶の共有手順

地域の思い出を共有するために住民個人の地域に対する思い出を集めたDISCOVER大和を以下の手順で作成した（図-2）。

まず住民個人の地域に対する思い出を収集するために、住民に対するアンケート調査、地域イベントでのヒアリング調査、WSによるヒアリング調査、まちづくり活動等に参画した方々へのインタビュー調査を実施した。住民に対するアンケート調査は大和地区の全世帯にアンケート票を配布し、郵送回収を行った。地域イベントでのヒアリング調査は、大和地区の体育祭（2009年10月11日（日））に参加し収集した（写真-1）。具体的には、個人の思い出を付箋に書いてもらって、爪楊枝に巻き付け旗を作成したうえで、それを地域の地図ボードに差し込むようにして収集した。WSによるヒアリング調査は、「大和の思い出から地域再発見」をテーマとして2009年12月23日（水）13時30分～15時30分に第1自治会館にてワークショップを開催した（写真-1）。ワークショップでは地域の思い出を集める意義について解説した後に1980年頃からの住宅地図図の上に地域の思い出を付箋に貼っていった。まちづくり主体へのインタビュー調査は、

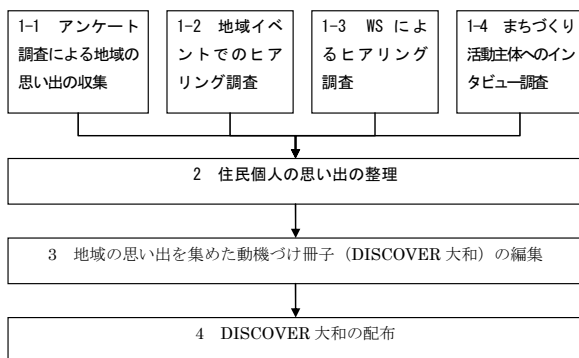


図-2 DISCOVER 大和の作成手順



写真-1 地域の思い出の収集



図-3 DISCOVER 大和 創刊号

思い出を整理してテーマを絞っていく中で適宜実施した。

個人の思い出を地域で共有するためにDISCOVER大和を作成した（図-3）。作成に当たっては整理した思い出のなかから数が多い空間を抽出し、創刊号は公園、第2号は地域の店舗、第3号は牧の台小学校をテーマにした。それぞれの号は、A4サイズ、4ページで作成し、構成も表紙にテーマに沿った昔の写真、2、3ページ目は思い出とそれに対するコメント、4ページ目にはまちづくり主体へのインタビュー記事を掲載するように統一した。

DISCOVER大和は創刊号を2009年12月11日、第2号を2010年2月5日、第3号を2010年3月18日に新聞折り込みにて配布した。

### 4. アンケート調査の概要

事前のアンケートは、平成21年11月8日（日）、9日（月）に大和団地内の全世帯（4311通）のポストに投函して配布した。回収は郵送回収にて行い、回収数、1207

表-1 アンケート項目

分類	設問項目		
慣れ	所属感	大和の一員だと感じる	
	連帯感	大和の人々に連帯感を感じている	
	交流機会	顔なじみや知り合いと交流する機会が多い	
	交流楽し	顔なじみや知り合いとの交流は楽しい	
	無抵抗感	大和の生活になじんでいる	
	変化嫌	大和の街並みがかわってしまうのはいやだ	
	親しみ	印象	大和に良い思い出が詰まっている
		郷土	大和はふるさとだと感じる
個性		大和に街の個性を感じる	
歴史		大和に街の歴史を感じる	
視覚		大和を美しいと感じる	
体感		大和を心地よいと感じる	
場所構築	買物	地域内の店でよく買物している	
	用事	地域内の公共施設をよく利用している	
	通院	地域内の病院をかかりつけにしている	
	運動	地域内で散歩や運動をよくする	
	高密交流	知り合いと交流する際に地域内に自宅以外で決まって利用している場所がある	
	低密交流	地域内に、賑やかと感じ足を運ぶ場所がある	
	癒し	地域内に自宅以外でくつろぐことができる場所がある	
	作業没頭	地域内に自宅以外で作業や仕事に没頭できる場所がある	
居住意向	永住意思	大和を終の住み処にしたい	
	居住予定	これから先も大和にすむ予定だ	
	満足度	今の住まいや環境に満足している	
	居住意思	これからも大和に住み続けたい	

通（回収率：28%）をえた。

アンケート項目は地域のなじみの各項目（表-1）と今後の居住意向（表-1）および場所の記憶、地域の思い出を自由記入方式でたずねた。なお、地域のなじみの各項目の選択肢は全てリッカート尺度5件法（例：全くそう思わない・あまりそう思わない・どちらともいえない・そう思う・強くそう思う）を用いた。

男女の偏りは無かったが（男：48.6% 女：48.2%）60代以上の回答者が7割と高齢者層となった。

## 5. 地域への「なじみ」の意識構造

### (1) 地域へのなじみの意識

なじみに関する項目の集計結果を図-4に示す。

- ・地域への慣れに関する項目（所属感、連帯感、交流楽し、無抵抗感など）は高い。
- ・地域への親しみに関する項目のうち、印象、体感が高い一方で、個性や歴史については評価が低い。
- ・地域の使いこなし（場所構築）に関する項目のうち、買い物や通院など日常的な生活行動の多くは地域内で行われている。しかし、地域住民の交流については評価が低い。

### (2) 地域へのなじみの意識構造

変数の関係性を概念レベルで把握し、住民の地域へ

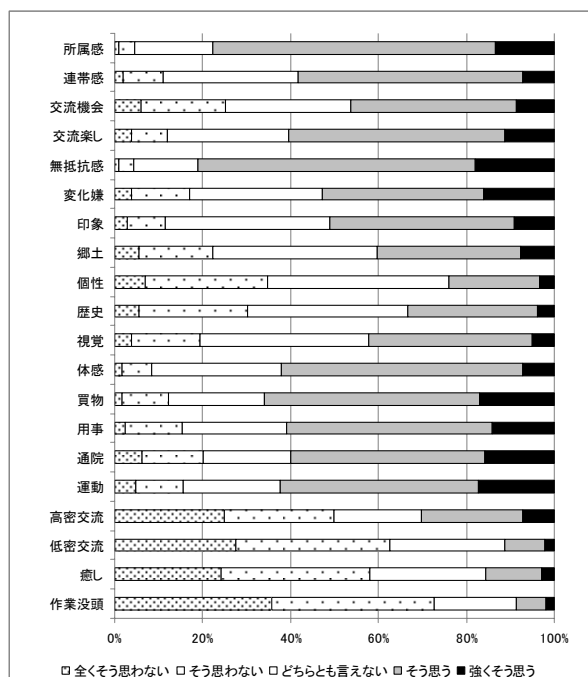


図-4 地域のなじみの集計結果

のなじみに関する意識構造を把握するために因子分析を行った。主因子法、プロマックス法を用い、固有値の下限を1としたところ、4つの潜在変数が抽出された。この結果より、第一因子は「慣れ」、第二因子は「親しみ」、第三因子は「任意活動の場所の使いこなし」、第四因子は「任意活動の場所の使いこなし」と名付けることとした。

「慣れ」の構成要素には「使いこなし」に見立てていたような、場所構築に関する項目は入らず、「所属感」「連帯感」「交流機会」「交流楽し」「無抵抗

表-2 因子負荷行列

	因子1	因子2	因子3	因子4
所属感	.666	.056	.128	-.102
連帯感	.654	.106	.093	.000
交流機会	.735	-.237	-.027	.287
交流楽し	.797	-.168	-.029	.160
無抵抗感	.709	.065	.106	-.114
変化嫌	.143	.402	.078	-.096
印象	.731	.217	-.100	-.072
郷土	.585	.299	-.119	-.023
個性	-.011	.749	-.037	.119
歴史	.058	.646	-.051	.076
視覚	-.161	.782	.037	.038
体感	.200	.585	.063	-.030
買物	.000	.000	.627	-.086
用事	.070	-.029	.646	.097
通院	.021	.011	.449	-.008
運動	-.009	.103	.377	.143
高密交流	.044	-.064	.131	.685
低密交流	-.126	.132	.055	.829
癒し	.060	.051	-.052	.758
作業没頭	.048	.022	-.100	.707

感」「変化嫌」などの「慣れ」に見立てていた項目が主に見られた。これは「慣れ」が精神的な絆を示すものであるとしたことから内的には妥当な結果であると考えられる。また「親しみ」の構成要素にも「使いこなし」に見立てていたような場所構築に関する項目はほぼ入らず、「印象」「郷土」「個性」「歴史」「視覚」「体感」などの「親しみ」に見立てていた精神的な絆を示す項目が主に見られた。これにおいても「慣れ」と同様に、内的な妥当性が確認できた。さらに「使いこなし」の構成要素には「慣れ」や「親しみ」に見立てていたような心理的要素に関する項目は入らず、場所構築に関する項目のみが見られた。これは「使いこなし」が精神的な絆ではなく肉体的な絆を示すものであるとしたことから内的に妥当な結果であると考えられる。

## 6. 場所の記憶の共有による地域のなじみへの影響

### (1) DISCOVER大和の評価

DISCOVER大和の第2号が発行された時点で、DISCOVER大和を知っているかどうかと読んだかどうかについて尋ねたところ、いずれも3/4の住民が知っている、読んだことがあると回答した。創刊号、第2号ともに新聞折り込みで朝刊を取っている大和地区の世帯に配布したため、認知度が高い。

つづいてDISCOVER大和を読んだことがあると回答した人に対して、その評価を5段階で尋ねたところ、「とても面白かった」「面白かった」と回答した人がそれぞれ12%、61%で約3/4の住民が面白かったと積極的に評価している。このことから今回発行したDISCOVER大和は概ね住民に好意的に受け入れられたと考えられる。その理由について聞いたところ、高齢者の回答者が多いこともあって、「なつかしかった」「昔の大和が知れた」が半数以上の人がある理由にあがっている(図-5)。

DISCOVER大和を読んだことがあると回答した人に対

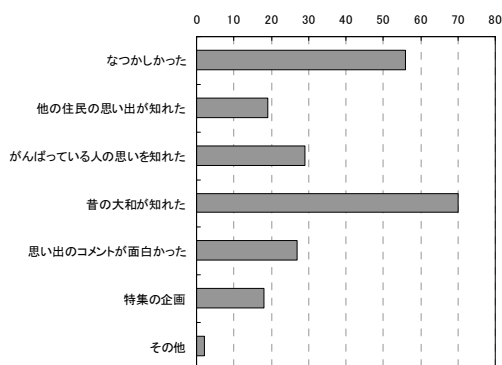


図-5 DISCOVER大和の良かった点(複数回答)

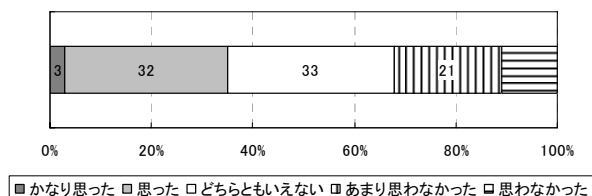


図-6 外出行動意図の変化

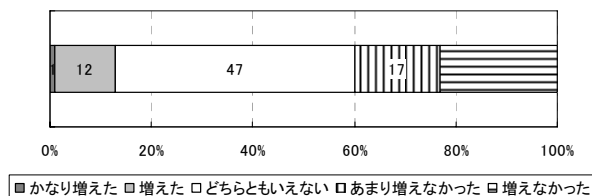


図-7 外出行動の変化

して、外出行動意図(「DISCOVER大和」をご覧になって公園や店舗を行ってみようと思いましたが?)および外出行動(「DISCOVER大和」をご覧になって公園や店舗を使う回数が増えましたか?)の変化を尋ねた。その結果、地域内の公園や店舗に行こうと思った人の割合は35%を占めており、外出行動意図の活性化の効果は見られた(図-6)。実際の外出行動で増えたと回答した人は13%となり、行動意図から実際に行動に移した人は1/3程度であったが、一定の効果はあると考えられる(図-7)。この効果をより上げていくためには、店舗側での対応(品揃えの充実など)が必要と考えられる。

つづいて地域の思い出の共有によるなじみへの影響について分析するために、DISCOVER大和を配布する前と後で地域のなじみの変化を集計した(図-8)。集計に当たっては、「強くそう思う」を2点、「そう思う」を1点、「どちらともいえない」を0点、「あまりそう思わない」を-1点、「そう思わない」を-2点として、平均値を算出した。したがって、マイナス方向にある項目はネガティブな傾向にあることを示している。以上の分析の結果、以下のことが明らかになった。

- 地域へのなじみの事前調査で相対的に低かった「親しみ」の郷土、個性、歴史の項目が有意に向上した。
- 地域へのなじみの事前調査で相対的に低かった「場所構築(使いこなし)」の交流機能の項目が有意に向上した。

## 7. 結論

本研究では以下の点が明らかになった。

- 場所の記憶を地域で収集する方法として、地域イベントでのヒアリング調査(大きな地図に付せんを貼ってもらう方法)、まちづくり主体への個別ヒア

ング調査、地域住民を対象にしたワークショップ、地域の思い出や記憶を収集するアンケート調査を提案し、それらをもとにして個人的な記憶を地域で共有する情報シート（DISCOVER大和）づくりを提案した。また、この情報シートの住民評価は総じて高かった。

- ・ 郊外ニュータウンでの地域のなじみに関する意識構造を分析し、「地域のなじみ」は「慣れ」、「親しみ」、「必意活動の場所の使いこなし」、「任意活動の場所の使いこなし」の因子から構成されることが示された。
- ・ 場所の記憶を地域で共有することによって、郊外ニュータウンでの地域へのなじみの事前調査で相対的に低かった「親しみ」の郷土、個性、歴史の項目、「場所構築（使いこなし）」の交流機能が有意に向上した。したがって、場所の記憶を共有することだけで地域のなじみの構成要素のうち、個性や歴史性を高める効果が示唆された。

以上の結果から、以下のようなことが考察される。

街づくりにおいては何より利便性が重要視され、「場所と人との絆」が守られにくい傾向がある。高齢化してきている郊外団地では団地内の就学者の人数も少なく、教育施設などは統廃合の対象になり、取り壊しになる例も少なくない。また公園なども少子化の影響などから以前より利用者が減り、メンテナンスに力が入れられず荒廃してしまっていることがよくある。

イベントも参加者が減ってきていて継続を疑問視する声も少なくない。しかし、これらのように見かけ上、利用者が少なくなってきたものも実際はそこに居住者たちの深い思いがこもっており、居留意向に繋がる絆の源としての大切な場所である。よって見かけ上、必要性が減ってきたからといって簡単に切り捨てるのは郊外団地を良い居住地として残していく意味においては裏目になるということも考えられる。また現在も必要性があり利用されている空間もその本質的機能だけ着目して考えるのではなく、本質的機能以外の部分にも注意を払い、大切にしていくことが必要であると考えた。

さらに、こういった深い思いの詰まった空間はどんな言葉よりも空間の意味を暗に伝えるものなので、新しく地域に入ってきた人にもモラルや教訓を伝える教師の役割を担うことができる。そしてその意味が地域と新規居住者をつなぎ、新しい土地でのなじみ方のきっかけを与えてくれるものと考えられる。

また地域の思い出を場所の歴史として伝えていくオーラルヒストリー（口伝）のような草の根の活動はもっとわかりやすく、効果的な活動と考えられ、郊外ニュータウンへの転入者の「なじみ」を醸成するために推奨されたい一つの手段である。

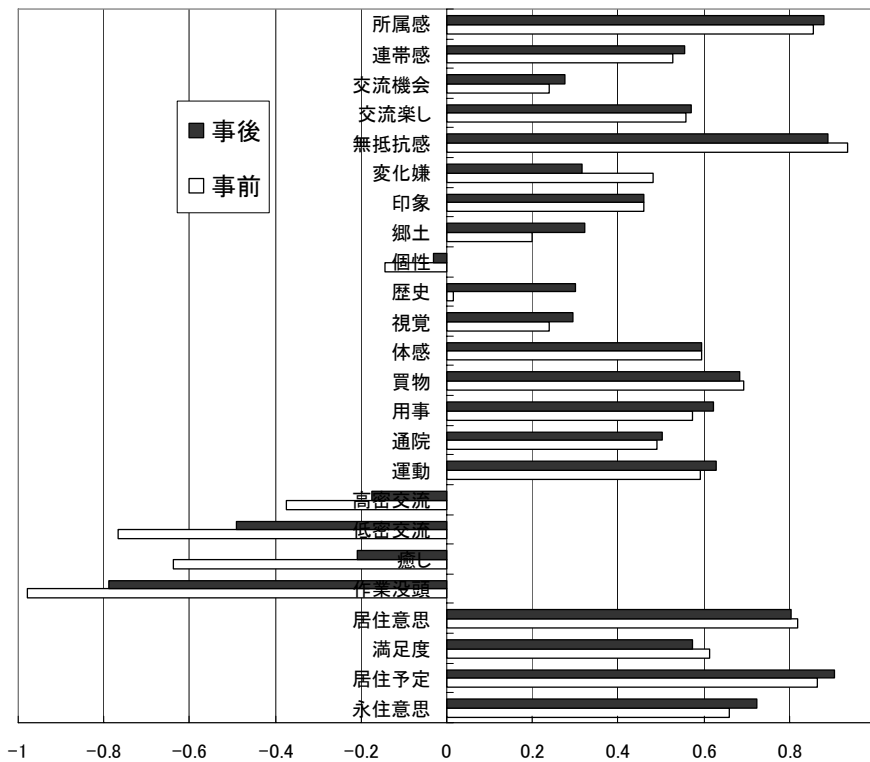


図-8 地域の思い出の共有による地域へのなじみの変化

